

博報財団は次代を担う子ども達の「豊かな人間性育成」の実現を目指して活動を続けています。

博報財団(正式名称:公益財団法人 博報児童教育振興会)は、次代を担う子ども達の豊かな人間性の育成のために、児童教育の実践者を顕彰する「博報賞」をはじめ、「児童教育実践についての研究助成」「国際日本研究フェロシップ」「世界の子ども日本語ネットワーク推進」「博報財団こども研究所」など、「ことば」「文化」の領域を中心に児童教育の支援につながる活動を行っています。2018年度にはこれに加え、新たに「博報教職育成奨学金事業」を設立しました。

博報賞 — 教育現場の地道な努力を顕彰し、優れた実践の輪を広げます —

博報賞は、児童・生徒に対し日頃、教育現場で尽力されている教育実践者・学校・団体の顕彰を通して、児童教育の現場を活性化させることを目的としています。

フォーラム参加者の声をご紹介します

- 「地域に開かれた教育活動」を進めていく上で大きなヒントをいただくことができました。
- 教育者として、大人として、人として大切なことを自分に問い、考えることができる時間であった。
- 様々な人の意見を聞くことができ、また新たな「道しるべ」をつくることができました。
- 今、「チーム学校」ということばをよく耳にしますが、みんなで同じ方向を向いて教育をしていくことが、教育効果を上げる大きな力になると感じました。
- 全国から集まった方々が活発に発言、交流されていることに自分自身も元気をもらえました。
- それぞれの事例が長時間をかけて培ってきたものの発表で、とても価値のあるものであると思いました。
- 今からの教育で大切にしたいことがよくわかった。「道しるべ」のとなえ方がよくわかり、キャリア教育を進める上でも意識して取組みたいと思った。
- 参加されている先生の意欲や前向きな姿勢が印象的だった。
- キーワードは、やはり「人とのつながり」「地域との絆」だと思いました。私も「つながり」を大切にして頑張ります。
- テーマについて、あらゆる実践や発表、意見などから、様々な見方、考え方を深めることができました。
- 自分が担当しているふるさと教育や特別支援教育の内容でヒントをいただき、振り返ることができました。
- どの発表も取組みを継続する中で、地域や保護者など周りも巻き込み、よい実践になっていったことがわかった。

編集後記

おかげさまで、博報教育フォーラムは今年で第15回、また、博報賞は来年をもちまして第50回を迎えることとなります。節目にあたる今回、「つながりが生みだす 未来への道しるべ」というテーマは、多くの方々に支えられて歩んで参りました、博報教育フォーラムの活動を総括するような、非常に奥深いテーマになったと感じております。

毎回、各受賞者の体験および様々な取組み、創意工夫が織り込まれている3つの事例発表ですが、今回の発表で共通して実感したことは、「～べき」という固定観念に縛られた不動のゴールに向かって突き進む教育から、ゴールやビジョンが活動の中で変化していく自由で柔軟な教育へ変わって来ていることでした。実際の道路にある道しるべとは違い、教育や人生の道しるべは活動と共にどんどん変わっていきますし、その変化の中にも成長がある。大切なのは、子ども達の二

ズの変化にしっかり寄り添うことであるとも言えるかもしれません。

そして、こうした自由で創造的な教育においては、誰と・どこで・何をしたか、本物体験・感動体験を通し、子ども自身が何にビビビッときたかが、子どもにとって重要な道しるべとなるのではないのでしょうか。それは、人かもしれないし、本や映画、ことばかもしれません。また、どこで何を感じるのかは子ども一人ひとり違います。その機会をつくるのが大人の支援であり、見守る姿勢であり、教育なのかもしれないと感じました。

グループセッションでは、各人が「私の道しるべ」について振り返ったとき、多くの参加者が「人との出会い」を挙げていらっしゃいました。子ども達にとって、また、皆さんにとっての道しるべとはなんでしょうか。教育関係者、地域、保護者の方々に「つながりが生みだす 未来への道しるべ」についてお考えいただくためのヒントになればという想いを込めて、このレポートをお届けいたします。

第15回

博報教育フォーラム レポート Hakuho Education Forum Report 2018



つながりが生みだす 未来への道しるべ



博報教育フォーラムは

優れた教育実践のエッセンスを体感できる場を提供します。

優れた教育実践には、広く他の教育現場で新たな価値を生み出すためのエッセンスが含まれています。このフォーラムは、教育の新しい潮流となりうる旬のテーマと優れた教育実践の事例を選び、様々な立場の参加者が共に考えを深めて意見交換をする場を提供することを通して、優れた教育実践を他の実践現場へ拡大・波及させることを目的としています。

第15回 博報教育フォーラムプログラム

1 事例発表

「博報賞」受賞者が活動事例を発表します。教育界に風を吹き込んだユニークで優れた実践を、フォーラムのテーマに沿って、別の観点から眺めるとどうなるか？魅力的な教育モデルだけでなく、子ども達への教育実践者の熱意が伝わってきます。



2 基調講演

教育界から注目を集める専門家による、テーマを俯瞰した講演です。フォーラムのテーマを学術的視点や実践的視点など広い視点で捉え、テーマの意味や課題の整理、問題提起、解決の糸口の提案などをしていきます。



3 ポスターセッション

事例発表者が特設ブースで活動事例を展示報告します。事例発表、基調講演の後、展示されたポスター、子ども達の作文、実践カリキュラムやオリジナル教材を手に取りながら、テーマをより深く考え、理解し、実践的なノウハウを吸収する、参加者と発表者、参加者同士のネットワークづくりの場です。



4 パネルディスカッション・グループセッション

事例発表や基調講演で提示された様々な要素を、パネルディスカッションやグループセッションの中で、整理したり、深めたりしながら、参加者一人ひとりがテーマをより主体的に考える場です。パネリストによるクロス討議に会場も巻き込みながら、考えを深め、触発し関連事例の追加提示などをしていきます。



第15回博報教育フォーラム

つながりが生みだす 未来への道しるべ

何かを目指して歩くとき、道しるべは大きな助けになります。その道が回り道だとしても、思わぬところにヒントが隠れていたり、楽しみが湧き出たり、誰かとつながったり…と思わぬ喜びがあるものです。またそこに、全く思いもよらない道がひらけたり、大きく方向転換することがあるかもしれません。これまでの歩みの中で、印象深い道しるべはありますか？ これまでに会った道しるべや、これからの子どものための道しるべについて、皆様とご一緒に考えました。

Case.1

『その子らしさ』を活かす発達支援 ～縦と横の連携を紡ぐ～

* * *

滋賀県 甲賀市立甲南中部小学校
校長 小西 喜朗



学習障害児への理解がまだまだ低かった時代。その指導のあり方を模索する中で、子ども一人ひとりの生涯に亘る支援体制を確立した小西校長。その先駆的な歩みには、子どもや親たちとの出会いという道しるべがありました。

手探りの理解と指導

「どうして東京に雪が降って、（豪雪地帯の）滋賀県には雪が降らないんだ」。通級指導教室に勤めて3年目、ことばの教室をしているときでした。子どもが教室に来るなり叫びました。2月の終わり頃です。朝から機嫌が悪く、先生も困られて、こちらに行かせますということでした。話を聞くと、その子どもさんの中で「こうあるべきだ。なっていないんじゃないか」と、「べき」が衝突している。そこで、関西気象協会に電話をかけ、子どもに説明していただきました。すると、コロッと（態度が）変わって、「先生、勉強に行きましょう」と。そういう子どもさんでした。

このような子どもさんをどう理解したらいいのか考えました。結局わからず、「幼児期に一旦音声言語を消失し、現在、高い知能水準にありながら、学習に特異な問題を示す事例」として、1985年に滋賀大学の教育研究所の紀要にまとめましたが、自分が理解したことを他の先生にどう理解していただけたらいい

のかが次なる課題になりました。

また、保護者の指導や担任との連携を考える中で、このような子どもが他にもいると思い、1988年に市内の各通常学級の先生にアンケートを行いました。その後何度も全県調査などを行いました。そのことは、学習障害児の存在をアピールする一つの機会になりました。そのときに担任の先生がよく言われたのは、「こんな子、今まで見たことない」。そういう言い方もあるのかと思いました。説明をさせてもらいながら一緒に考えていきました。

保護者の願いから個別指導計画を模索

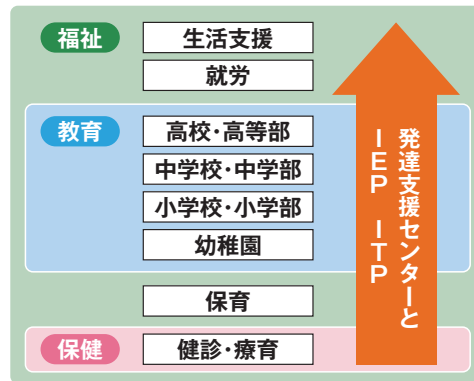
その後、転勤した湖南省の保護者にこう言われました。「工場では品質管理を求められますが、学校の指導内容の品質管理はどう担保されているのですか」。「えっ!!」と思いました。支援・指導内容をどのように継続していくのかということです。その裏にはこのような想いがあったと思います。担任が変わる度に、また一から説明しなければいけないとい

う不安。それでわかってもらえればいいが、その度に「こんな子、初めて見ました」と言われたときの親の気持ち、わかりますか。子どもも親も、先生も皆困っている。その答えを見つけないといけない。

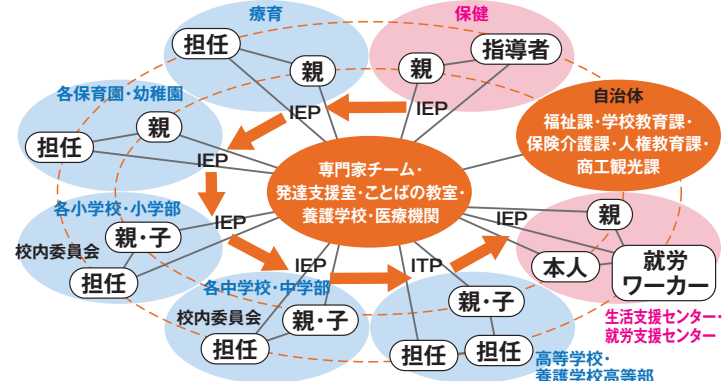
そのときに出会ったのが、1995年、安田生命事業団の『個別教育計画の理念と実践』という本でした。通級指導教室と肢体不自由児学級と知的障害の先生で、実際に個別の指導計画をつくってやってみることにしました。それを見た医療の方は「教育もカルテで連携するところまでできましたか」と驚いていました。

その後、県の奨励論文に応募し、個別指導教育の研究会をつくり、個別指導教育を校内の障害児学級から広げていこうとしました。さらに、町内の通常の学級にも広めていこうと、文科省の委嘱研究の協力地域として、2000年から2001年、「学習障害児に対する指導方法等に関する実践研究」を受けさせていただきました。その実践の中で、担任の先生から色々な話が出てきました。「勉強ができないというけど、知的障害の子どもさんの場合とどう違うの?」とよく聞かれました。そのときには、「結果ではなく、プロセス、勉強のわかり方、できにくさを見てください」と、心理検査の結果など、色々なことをお

湖南省のめざす地域支援システム



個別指導計画のつながり



話しました。この研究が終わる頃には、先生方の指導案の中に、子どもの特性を意識したものが増えてきました。特性に応じた支援の仕方が授業内にあると気づき始めていたきっかけでもありました。

縦と横の連携で支援の継続性を担保

こうした取組みは、「この町に生まれ育っていく子を町がどのように育むのか」という命題に発展していきました。そのために子どものニーズへの支援をどう協働していけばいいのか。そこで、支援の継続性の担保を目的に、「縦の連携」と「横の連携」ということを標榜しました。「横の連携」として、実現可能な目標に向かって想定される支援関係者の役割分担をしっかりと見ていく。「縦の連携」として、社会的自立と自己実現のために、幼稚園、小中高と途切れず支援し続け、最終的には就労支援まで一本化していきます。そのための取組みとして、平成12、13年頃から、イントラネットによる情報共有、支援情報の蓄積を始めました。Aちゃんの情報を開けたら、今までの指導内容が全部見られるという形です。

その後、「必要な人に必要なときに必要な支援を」ということにつながっていきました。生涯に亘る支援

体制を構築していく中で、一番大事なのは「ケース会議」です。支援は「タイミング」と「内容」がとても大事です。ずっとついて回っていたら支援ではありません。ですから、その子に必要なとき必要なことを誰がどうするか、役割分担を考えていきます。その際には、誰も悪者にしないことが大切です。私は福祉課と教育委員会を兼務しておりましたので、枠を越えて子どものために子どものための支援をつなぐ仕事をしておりました。

「あきらめない」「抱え込まない」「チームワーク」これがケース会議の合い言葉でした。それぞれの領域を越え、相手の立ち位置で困っていることを見ていくことで、役割分担をしながら問題点を深めていきました。子どものニーズに必要なメンバーを集めて役割分担を考えれば「横の連携」になりますが、共通の理解がないと連携しにくいこともありました。そこで、各々の専門用語の共通理解、巡回相談で支援の必然性の共有をしていきました。連携には、「この目の前の子どもを何とかしたい」という気持ちが大事だと思います。

そして、成長と共に変化する状況でも支援を継続していくつながりが「縦の連携」です。行政にとって

も社会的自立を促して納税者（＝支えていく側）を増やしていくことは大事なことです。成長と共に変化する継続していく支援が必要です。そこで、就労支援の枠組みの方にも入っていくわけです。

つながりと道しるべ

振り返ってみますと、人は出会うべくして出会う。親御さん達がいたから今の私がいますし、子どもや親御さんのニーズを形にしていって、発達支援システム、発達支援の継続という形になっていったと思っています。子ども達の成長と共に、その自己実現に向けて支援が連鎖するように必要な出合いを紡いでいくことが大事ではなかったか。

「All for one, One for all」。みんなは一人のために何ができるのか、一人はみんなのために何ができるのか。「何ができるのか」を具体化させていくことはとても大事だと思います。自立とはひとりぼっちで頑張ることではなく、支え合いながら頑張っていくことです。お互い支え合うことが連携という形になれば、より充実したものになっていくと思っています。（拍手）

Case.2

チーム奥出雲で取り組む『たたら体験学習』 ～未来へつなぐ絆とふるさとへの誇り～

* * *

島根県 奥出雲町文化体験実行委員会
委員長（奥出雲町立馬木小学校 校長）川田 勝巳



過疎に直面する町で、子ども達に伝えるべきこととは。伝統技術の「たたら製鉄」を通した体験学習で、ふるさとへの誇りを育んでいる奥出雲町文化体験実行委員会。その熱き想いと取組みに未来への道しるべが見えました。

奥出雲が誇るたたらを子ども達に

奥出雲では、古代よりたたら製鉄が続けられてきました。たたら製鉄がもたらした富によって様々な文物がもたらされ、山間にありながら、独特な文化が蓄積しています。原料の砂鉄と木炭が豊富なことから、近代には鉄生産の中心地帯へと成長しました。明治に開国すると衰退にむかい、大正時代には廃業となりましたが、昭和52年に技術の消滅を危惧した日本美術刀剣保存協会（以下、日刀保）により復活。現在では国の選定保存技術となり、その鉄は日本刀の鍛錬技術の継承を支えています。

たたら体験学習のこれまでの歩みです。昭和63年、横田中学校ミニたたら体験の取組みから始まります。平成13年には、馬木小学校のふるさと学習として、小学校で初めて実施。平成16年に、旧横田町内の4つの小学校に広がりました。平成17年には、旧仁多町と横田町が合併した「奥出雲町」の誕生に伴い、町

内全小学校が参加する取組みへと拡大しました。このときに、奥出雲町文化体験実行委員会を設立。メンバーは、仁多郡校長会・教頭会・教育委員会社会教育課・各小学校担当教員で、今年度は総勢22名。オール奥出雲で取組んでいます。

「つなぐ・伝える・表現する」というテーマですが、当初は体験そのものがゴールであり、テーマは設けていませんでした。平成21年度に「つなぐ」を設定しました。「木炭係」「砂鉄係」「計測係」「ふいご係」という子どもの仕事を、グループからグループへ、学校から学校へ「確かにつなぐ」というねらいがあります。翌年には、コミュニケーション能力の育成を目的として「伝える」を追加。平成25年度には、まとめとして「表現する・発信する」という新たなゴールを設定しました。

3日間のたたら体験学習の内容です（図参照）。炉づくりのための粘土や鉄穴流し（かんながし）の砂鉄の準備、本操業でのサポートなど、全小学校の管理職が出かけで行います。

事前・事後学習で学校ごとに深く学習

次に事前・事後学習です。単なる鉄づくり体験で終わらせないために、事前・事後の各学校での学習が重要です。各学校共通の事前学習として、まずは子ども達がDVDや過去の体験実践集等を見てたたら製鉄の概要を知り、「何を・どのように学ぶか」課題を持ちます。それ以外に、各校区内の特色を活かした事前学習を行います。校区ごとに、たたら製鉄と関係の深い「ひと・もの・こと」があります。それらと出会い、事前学習を深めていきます。例えば、鉄穴流しによってつくられた棚田の見学、鉄穴流し間歩跡の見学、旧鉄師である絲原家・櫻井家の見学。これらは「もの」との出会い。たたらを観光資源にと活動している方への取材は、たたらに対する熱い思いに触れる、「ひと」との出会い。鳥上地区に伝わる祭の学習は「こと」との出会いと言えます。

総まとめの事後活動も、各校の特色を生かして行います。テーマの「表現する」に重点をおいた活動です。授業公開日に保護者にプレゼンテーションを行ったり、鋤（ケラ）の巡回展示に合わせて全校集会で発

3日間のたたら体験学習

1日目

たたら刀剣館での事前学習会



たたらと奥出雲の文化との関わり、木原村下の思いなどを聞きます。その後、たたら刀剣館の展示物を見学し、理解を深めます。

2日目

炉づくり・鉄穴流し・炭切り



炉づくり

炉の地面から湿気が上がらないよう、燃えた炭をたたきしめます。▶こねて煉瓦状にした粘土を積み上げ炉に。▶炉を一晩かけて乾燥させます。



鉄穴流し

原材料の砂鉄は奥出雲の山砂に含まれており、その山砂を水路に流して攪拌し、水路の底にたまった砂鉄をスコップですくい取ります。



炭切り

炉に欠かせない木炭も、炭焼き釜でつくられた炭を子ども達が切って準備していきます。

3日目

本操業



朝から夕方まで砂鉄と木炭を炉に交互に入れ、炉の温度を上げるため、ふいごで炉に空気を送ります。▶炉を壊し、真っ赤に燃える鉄の塊を取り出します。▶取り出した鉄を水の中に入れて冷やし、終了。今回の鋤（ケラ）は過去最高の重さに！

表したり、学習のまとめとして「たたら新聞」を作ったり、様々な工夫が各校でなされています。

ふるさとへの誇りを育む縦と横のつながり

たたら体験学習が生み出す「つながり」について説明します。大きく「縦のつながり」と「横のつながり」があり、それ自体が大きな成果でもと考えています。「縦のつながり」は、千年以上続きたたらの技術や想い、たたら製鉄が生み出した奥出雲の文化の素晴らしさ、先人の挑戦、工夫、不屈の精神、連帯などを伝えるものです。「縦のつながり」は、村下（むらげ＝たたら製鉄操業のリーダー）への質問タイムを設けることで効果を上げています。村下の生き方や考え方に触れることは、ふるさとへの誇りを



木下村下（むらげ）と子ども達

育てることにつながると考えます。

たたら体験学習は、多くの小学校が「横のつながり」をもって行う事業です。教員は見守る姿勢でいるため、違う小学校の子ども同士が協力し、作業をつないでいかな

ればなりません。そのため、子ども達のコミュニケーション力や主体性が育ってきています。また、事後学習で、下級生や家族の方に体験したことを表現し伝える活動を行いますが、このことは、地域全体にたたらへの理解を深めていく「横のつながり」も生み出しています。

未来を指し示すのはふるさとへの愛情と誇り

子ども達のまとめの中から、1つご紹介します。「たたら学習をして、たたらはとてもおもしろく、奥深いということがわかりました。今まで全然関心がなかったけど、今回勉強したらもっと知りたいことがいっぱいです。たたらを途絶えさせないように、この奥出雲でずっと守り続けたいです」。たたら体験学習が、ふるさとへの愛情や誇りを育んでいることが分かります。このことは、地域や子ども達の未来も指し示しているのではないのでしょうか。

「過疎」という言葉は、50年以上前に島根県で生まれました。奥出雲でも人口は減り続け、現在では当時の半分以下。児童数も急速に減少しており、統廃合となった小学校もあります。なぜ過疎化するのか。大都市を成長エンジンとして国が成長していく中で、住民が土地に愛情を感じな

くなってしまった「誇りの空洞化」があると思います。奥出雲の方からこのような言葉を聞くことがあります「ここには何もない」。本当に何もないのでしょうか。どんな土地にも大切な歴史や文化があります。それを守ってきた人々がいます。ふるさとへの愛情は、その土地固有の歴史や文化を学ぶことによって育ち、ふるさとを愛する大人との交流によって育ちます。

たたら体験学習はふるさと学習であると同時に、主体性やコミュニケーション力を育てていくプログラムです。私たちは世界唯一のこの体験プログラムによって、ふるさとを自慢できるようになってほしい。そして、たとえ奥出雲を離れても、それぞれに住む地域の良さを見出し、誇りに思っている…そんな大人になってほしいと思っています。最後にうれしいニュースをお伝えします。先日行われた日刀保たたらの操業に参加した、新しい村下養成員がいます。この若者、実は、14年前のたたら体験学習の第1期生なのです。今後またたたら体験学習を続けることで、ふるさとを愛し、ふるさとの将来を担う子ども達を育てていきたいと思っています。たたら体験学習が生み出す未来への道しるべとは…「ふるさとへの誇り」が挙げられるのではないのでしょうか。（拍手）

Case.3

町を支え、町に支えられて行う、 地域貢献の取組み

* * *

新潟県 津南町立津南中学校 教頭 菊地 一秀
総合的な学習の時間主任 太平 美佳子



市町村合併せず、あえて自立の町を選んだ新潟県津南町。その気概に応えるかのように、津南町立津南中学校では地域への貢献を重視した教育を実践。生徒と町の人とのふれあいか、希望の道しるべが見えてきました。

地域への提言を テーマに学習

菊地 津南町は新潟県と長野県の県境にあり、豪雪で有名です。また、日本一の河岸段丘、五千年前の火焰型土器など、自然と歴史と文化を誇る町です。一方で、人口が1万人を割り、少子高齢化が進んでいます。現在、新潟県がふるさとへの愛着と誇りを育む教育を進める中、津南中学校は、総合的な学習の時間創設時から地域への貢献を重視した学習を展開してきました(図表①)。平成15年に津南町が市町村合併しないことを決めたことを背景に、町への提言をテーマとした学習が進められています。自分の生き方や地域との関わりの中に課題を見出すことを重視し、3年を通して地域とのつながりを育み、自分を高めていくように計画しています。

津南の魅力を再発見

太平 各学年の活動です。1年生は、「地域を知ろう・自己を広げよう」をテーマに活動します。地球規

模の大地の変動や苗場山の噴火により形成された日本一の河岸段丘、縄文遺跡、雪と森に育まれた美しい自然と歴史文化は、まさに生きた教材と言えます。津南町の魅力について知っていること、疑問に思うことの話し合いからスタートします。まだわからないことが多いことに気づかれます。

生徒のAさんは、河岸段丘は毎日見て知っているが、「なぜ9段もあるの?どうやってできたのか?」という疑問からスタートしました。まずインターネットや図書、町の刊行物で調べ、各段丘面の特徴や様々な質問は、「地域巡検」で専門家に質問することになりました。地域巡検では、各班が町内各地に出かけ、現地調査や地域の方への取材を行います。巡検当日、専門家の先生に各段丘を案内していただき、段丘の地層から火山灰を採取しました。火山灰は、夏休みにその先生と連絡を取って理科室で電子顕微鏡を使って観察し、レポートにまとめていました。Aさん達の壁新聞には、各段丘に名前があること、2万

8000年前の桜島の火山灰も段丘面に残されていたこと、電子顕微鏡で見た鉱物の美しさなど、新しい発見への驚きが書かれていました。

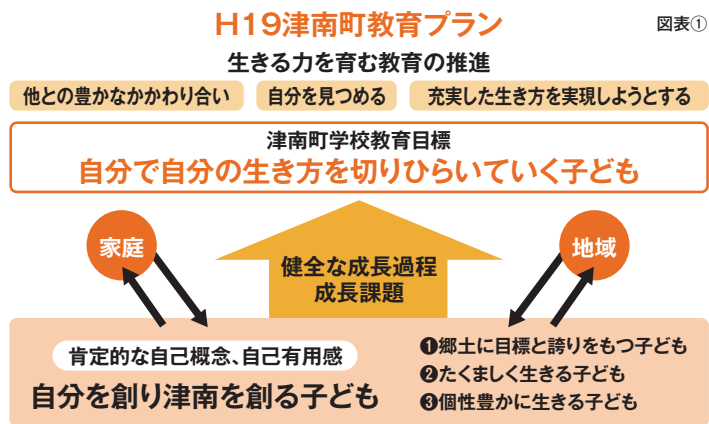


段丘の地層を調査する生徒達

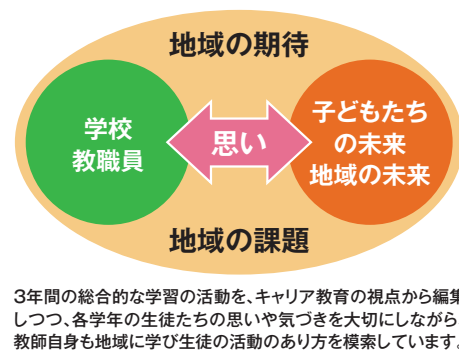
地域巡検はゴールではなく、活動から新たな疑問や次にやりたいことが生まれ、主体的な追求活動になっていきます。出会った地域の方達の生き方や考え方に触れ、自分の生き方、考え方への刺激にもなっています。お世話になった方々を招いてのポスターセッションで発表する姿には、自分で課題を見つけ企画して活動していくことの楽しさや達成感が出ていたと思います。

町の方と取り組む 津南のPR活動

2年生では、「地域と関わる・自己を深める」をテーマに、職場体験を原則一人1事業所で行っています。1年時から一人ひとりが課題を設定・選択する学習を経験しているので、周りに流されず、自分の意思を大切に事業所を選択しています。



キャリア教育の視点から 総合的な学習の時間を構築



2年生の修学旅行では、「商人体験」を行っています。「他地域に学ぶと共に、他地域に津南町の魅力を発信する場」として、毎年、何をどのように販売・PRするかプレゼンテーションの活動からスタートします。準備活動では、ポスターの企画やインターネットによる情報収集と平行して、実行委員の生徒が各機関や町内の菓子店に出かけ、商品提供の依頼や修学旅行先の京都でPRしてほしいことなどの情報を収集。生徒達はイメージに合う写真や効果的なキャッチフレーズを考え、ポスターやチラシ、PRカードを作成しました。

PR活動の準備を通して、町とのつながりがとても深くなりました。お菓子PR班は、店頭で試食や取材をさせていただき、津南らしいお菓子を選定していました。杉のコースター班は、森林組合から間伐材をスライスしていただき、職人さんから磨き方を教わり、生徒全員で紙やすりで磨きました。最後に、津南の見どころPRカードをコースターと一緒に袋に入れ、350個の杉のコースタープレゼントが完成しました。

修学旅行当日、京都駅前・京都タワー前でのPR活動は緊張したようです。しかし、ポスターに目を留めて話しかけてくださる方とのふれあいと共に、自然と笑顔が増

えていきました。「津南町のために活動している」という意識が芽生えてきたように思います。



京都の街角で津南町をPR

津南に戻った直後、京都のご夫婦からお礼の葉書が、その後、滋賀からはコースターを利用している写真とお手紙も届きました。自分達の活動が、遠い地域の人の心に届いたことを実感できました。

集大成の地域貢献活動

3年生は、「地域に貢献する・自己を見つめる」というテーマです。3年間の総合的な学習の集大成として、貢献したい内容を一人ひとりが考え、自分達の企画を関係機関と連携・調整し、準備作業を経て貢献活動を行います。昨年度は、夏休みに2日間行いました。夏の観光名所の一つ、ひまわり畑に出かけたPR班は、修学旅行で作ったポスターとチラシを使ってPR活動を行いました。また、ひまわり畑の迷路を作るお手伝いや、かかしコンテストへの参加も行いました。

介護士や保育士、教員などに関心のある生徒は、それぞれの施設でボランティア活動を行いました。森林組合の協力の下、木目の美しい木のパズルを作って保育園を訪問した班もありました。駅伝・スキー・野球などで活躍してきた生徒たちは、部活動でお世話になってきた総合センターや運動公園などの整備を。津南の歴史や文化に関心が高い生徒は、お世話になってきた「なじよん（農と縄文の体験実習館）」のスタッフのお手伝いを行いました。

自分の町は田舎だ、豪雪の町だと悲観的・否定的に思うのではなく、自分の町の魅力を十分に理解し、誇りながら、自分の生き方や自分の未来の夢を実現し、社会に貢献する生き方をしようとする子ども達を育てていきたいと思います。自分を尊重できるからこそ、自分と異なる他者も尊重できます。日本の社会や国際社会の未来を見ながらも、足元から未来を見つめる視点も大切なのではないでしょうか。現在、町の人口や若者の人数は年々減っています。今後の町は、今の子ども達が築いていくわけです。外に出て他地域を支えていく若者がいる一方で、信濃川をさかのぼって戻ってくる鮭のように、地元に戻り、地元を支え、発展させていく若者も大切だと思います。(拍手)

ポスターセッション風景

特設ブースに展示されたポスターや参考資料を基に各事例発表の理解を深めることができる「ポスターセッション」。
直接、発表者や関係者の方々と自由な意見交換もでき、熱のこもった議論が繰り広げられます。



Case.1 『その子らしさ』を活かす発達支援～縦と横の連携を紡ぐ～



▲長年に亘る取組みが今回の受賞となった、小西先生。事例発表では紹介しきれなかった、詳しい支援の仕組みや豊富な知見は、ポスターセッションの場で伝えられた。

▲様々なチャートで支援の仕組みをわかりやすく解説した配布資料も用意された。

Case.2 チーム奥出雲で取り組む『たたら体験学習』～未来へつなぐ絆とふるさとへの誇り～



活気あふれる3日間の「たたら体験」の様子をビデオでも紹介。



▲「たたら体験学習」の実施の流れが一覧できるポスター。製鉄の体験以外に様々なフィールドワークもあり、活動内容は幅広い。

▲平成29年度の「たたら体験学習」でできた34kgの鋼（ケラ＝鉄の塊）も展示。

Case.3 町を支え、町に支えられて行く、地域貢献の取組み



事例発表でも紹介された観光PR用の手作りコースター。生徒たちのぬくもりが伝わってくる。

生徒たちが企画制作した津南町の観光PRチラシ。しっかり構成され、プロ顔負けの出来映えだ。



▲ポスターでは、学年ごとに地域での取組みを詳しく紹介。学年が上がるにつれて成長していく様子がうかがえる。

Keynote

『未来への道しるべ』とは ～一歩先に歩み出すために～

■プロフィール

2005年より慶應義塾大学教職課程センター教授。著書に「学習意欲の理論：動機づけの教育心理学」（金子書房）、「子どもの姿に学ぶ教師—学ぶ意欲と教育的瞬間」（教育出版）など。



慶應義塾大学 教授 鹿毛 雅治

出会いや環境から投げかけてくる「道しるべ」を見出し、心の中にある「道しるべ」を立ち上げ、「希望」や「意欲」をもって一歩先に歩み出す。こうした取組みで成果をあげているのが前述の3つの事例発表です。

未来への到達点に向かって

「道しるべ」は、それを見る側、我々道歩きをする側から考えてみると、目指すべき地点が明瞭化したり、具体化することがあります。それと同時に、見通しが立って、一歩先へ歩み出すことができます。目指すべき地点にガイドされて行くということもあるし、あるいは紆余曲折があつて、目的が変わったり、そのプロセス自体がおもしろくなったりすることもあるかもしれません。

では「未来への道しるべ」とは何でしょうか。1つのキーワードは「ゴール」だと思います。まず「山頂を目指そう」とか、「あそこの池に行ってみよう」とか、一応ゴールを定めて歩み出します。ゴールは目標ですけれども、それは未来への到達点として一般には理解される。キャリア教育なら、たとえば「先生になりたい」ということであれば大学

は教育学部が第一志望になるかもしれませんが。未来の到達点に向かうためには、上位の目標に対して、その下位のゴールをイメージして進む。そのときときに道しるべが機能するということと言えるのかもしれません。

「未来へのプロセス」を考えたときに、プロセスという一本道で、そのプロセスを歩んでゴールに近づいて行くというイメージがあります。しかし、「それは一本道なのか？」と考えると必ずしもそうではない。そんなにスムーズなものではありません。さらに「一方通行なのか？」と考えると、後戻りをしたり、回り道をすることがあるかもしれません。

我々の人生には分岐点があり、そこで選択があつて進んでいく。まっすぐ行くのか、曲がるのか。一方通行とか一本道ではないわけです。そうした分岐点で我々は「意思決定」をしなければならない。

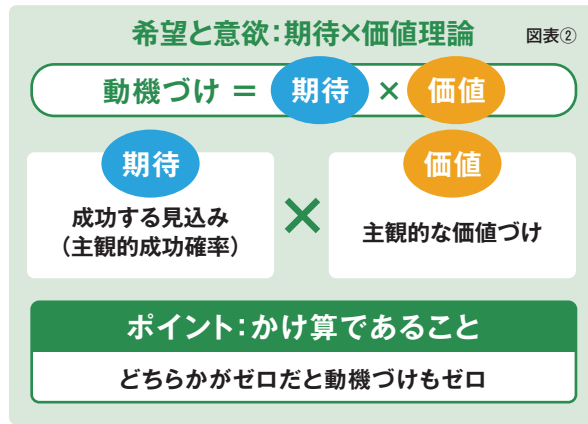
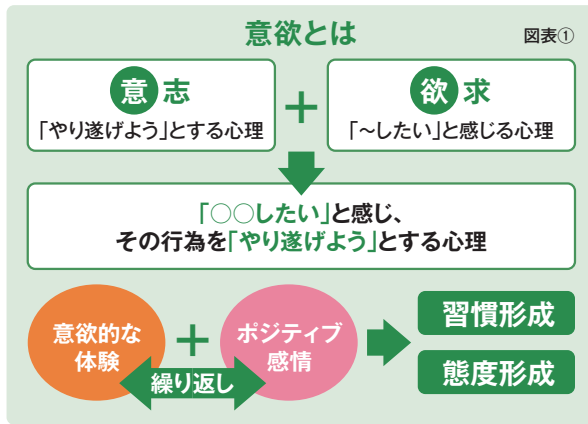
そして、分岐点で問われるの

は「展望」だと思います。右に行くのか、左に行くのかというときに、その先に何があるかという展望がなければ選べません。意思決定をする当人がどれだけ展望を持っているのかということが分岐点で問われることになります。

やる気をもって一歩先へ

さらに、道しるべに遭遇したときに、足元から「一歩先に歩み出す」ということが問われます。道しるべがあれば、意思決定せずに自動的にどこかに連れて行ってもらえるわけではありません。一歩先に歩み出すというのは、当人しかできません。道しるべがいくらあっても当人の責任で歩み出すわけです。足元のエネルギー、つまり「やる気」がなければ一歩先に進むことはできません。

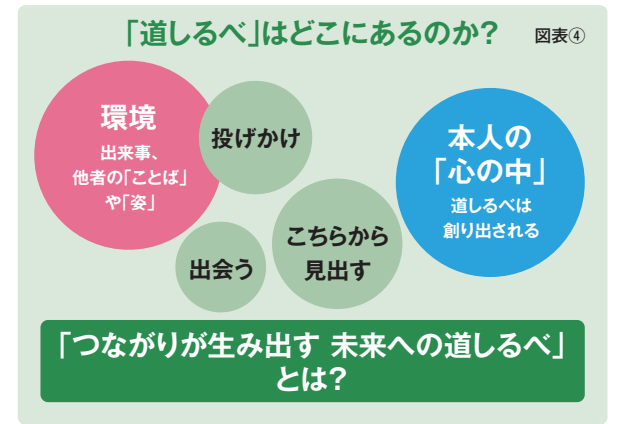
では、歩み出すために当人に求められているものは何でしょうか。1つは「希望」です。「こちらに行けば池がある」「こちらに向かえば山頂に行ける」という希望がなければ歩み出しません。もう1つは「意欲」です。「山頂まで行くぞ」という意欲がな



図表③ 期待×価値を計算してみよう

期待	どの程度、 その職に就けそうか (確率%:0.0~0.1)	価値	自分にとってその職が、 どの程度魅力的か (-10~+10)
将来の仕事	期待:確率(%)	価値	期待×価値
高校生の自分を想像 してつけてください。	例えば、100%絶対 就けると思えば1.0、 35%なら0.35。	例えば、絶対避けたい 場合、-10、どちら でもない場合、0。	動機づけの力
宇宙飛行士	(0.01)	(+10)	(+0.10)
政治家	(0.25)	(-6)	(-1.50)
ボランティア	(0.95)	(-1)	(-0.95)
教師	(0.70)	(+5)	(+2.80)

(Reeve,2001)



ければ一歩先に歩み出すことはできない。

津南中学校の事例発表で、修学旅行で津南町をどうアピールできるか、京都駅前では何ができるかと一歩進めることも「意欲」ですし、また、小西先生のお話では、発達障害や特別支援に教育界全体で理解がないときに、小西先生の側に「希望」と「意欲」がなければ今に至るということはないと思います。

「意欲」は、「意志」の「意」と「欲求」の「欲」を取った複合語という説があります(図表①)。「意志」というのは「やり遂げよう」という心理。それに対して「〇〇したい」というのが欲求です。「山頂まで行き遂げるぞ」という意志と「山頂に行きたい」という欲求の両方が合致することで「意欲」があると判断できます。「学びたい」と思い、「学び遂げるぞ」と思う子どもがいれば、「意欲的だね」となるわけです。

ではそこに、どのような教育的な意味があるのでしょうか。意欲的な体験とポジティブ感情が繰り返されると、習慣形成、態度形成になる。それが重要だと思っています。

たたら製鉄の実践の事例発表

では、子ども達が役割を志願して次の小学校に伝えるということが活動として取り上げられていました。「やり遂げるぞ」という意欲的な体験。「やってよかった」というポジティブ感情。達成感とか、充実感とか、それが繰り返されていくと「人に伝える」ことの習慣ができたり、「伝えよう」という身構えができたり、あるいは「人に伝えることはとても大切」という態度が形成されることになります。「考えてよかった」という経験が繰り返されると思考習慣がついて、思考することは大切だという態度、価値観が形成され、それが「思考力」になります。

期待と価値の2つが揃って

では、どういう原理で「意欲」が生じるのか。「期待×価値理論」を紹介したいと思います(図表②)。動機付けというのは、やる気は「期待」と「価値」の掛け算というのが「期待×価値理論」の骨子です。「期待」とは成功する見込みのこと。「Yes, I can」という気持ちです。もう1つは「価値」。これは主観的な価値付けで、「It's worth」。時間やお金をかけても意味があるとい



うことです。やる気というのは、「Yes, I can」と「It's worth」。「これはできる」という見込みを持っていること、そして、それをする、あるいはやった結果に価値を感じていること、この2つが、やる気が起こるためには必要だということです。しかも、ポイントは掛け算であるという点です。どちらかが0ならば、やる気も0になる。

たとえば山頂に登れそうだけれど、山頂に行くことに全然価値を感じていなければやる気は起きません。逆に、山頂には行きたいけれど、山頂まで25キロもあって、「そんなところまで登れない」というように「No, I can't」になってしまうと、いくら価値が高くても、やる気は起きません。この2つの掛け算でやる気は決まるのです。これは非常に重要なことで、価値をいくら感じても、できないと思えばやらない。逆に、そんなこと

は簡単にできるけれど、「やって何の意味があるの？」ということならやらない。その2つが揃ってこそやる気が起きるというのが「期待×価値理論」です。

「未来への道しるべ」から一歩歩み出すために我々に問われているのは、まさにこの「期待」と「価値」なのかもしれません。

ここで皆さんに、数字を入れて「期待×価値」の計算をしていたきたいと思います(図表③)。高校生のときの自分を想像してください。「宇宙飛行士」「政治家」「ボランティア」「教師」の4つの職業で、どの程度その職に就けそうかという確率について100%を1.0として「期待」の欄に書き込んでください。次は「価値」。自分にとってその職がどの程度魅力的かを当時を想像して書いてください。絶対になりたくなければ-10、絶対になりたいというのが+10、どちらでもないは0です。そしてこの2つを掛け算すると「やる気」になります。

(計算の結果、会場の皆さんのほとんどの方が、一番高い数値は「教師」でした)

さすがですね。やはりその通りになっている。これは仮想データ(Reeve,2001)から引用しま

した。「一歩先に」といったときに、「なれる」ということと、もう1つは、「どれだけ価値があるのか」ということ、その2つが我々にも問われているし、あるいは子ども達にも一歩歩み出すためにはそれが必要だということなのかもしれません。

構えがあるからことばが入ってくる

道しるべはどこにあるのか、私も振り返ってみました。私は小学校から中学校の先生になろうと思って大学に入りました。もう少し勉強がしたくなり大学院に進み、修士課程を終えたら先生になろうと思っていました。そのとき、たまたま同級生に進路のことで「迷っている」と伝え、「博士課程に行ってからでも先生になれる」と言われました。

最初は一本道だと思っていたけれども、もう一つの道が見えた。もう少し研究したかったというまさに「意欲」が私にあったのかもしれません。つまり「Yes, I can」という気持ちと「It's worth」という気持ちがあって、博士課程に進んだ。考えてみれば今この仕事をしているのは、その分岐点で意思決定をしたか



ら。道しるべはその同級生のことばだったのかもしれません。

道しるべは、出会いや環境から投げ掛けてくることがあるかもしれませんが、そういう環境にあるというだけではなく、こちら側がそこに意味付けをする、環境にあることを当人が見出すという点もとても重要なポイントだと思います(図表④)。ただあるから見えるというものでもなく、こちらに構えがあるからこそその道しるべが意味付く。むしろ道しるべというのは我々の心の中につくり出されるものなのかもしれません。それを頼りに我々は生きていく。そういうGuide Post、Finger Postが我々の中にあれば、そのときときに自分で将来を見通して、広い展望に立って、意思決定ができるということかと思いました。ご清聴ありがとうございました。(拍手)

出会いがある 今そこに道しるべが

3つの事例発表と基調講演を受けて、会場はパネルディスカッションへ。「つながりが生みだす 未来への道しるべ」について、コーディネーターの進行のもと、パネリストと参加者が一体となって意見を出し合いました。



●**嶋野** 最初に3つの質問をします。「そう思う」は青、「思わない」は赤のカードを挙げてください。
Q1「これからの社会、子どもの未来にとってつながりは非常に大切だ」—これは全員「そう思う」。
Q2「これまでの歩みを振り返って自分には道しるべがあった」—3〜4名が「そうは思わない」。
Q3「教育とは子ども達に道しるべをつくる営みである」—これは先程より「思わない」が多くなりました。全体としては肯定的ですが、個別的には色々ある。議論を深めていきたいと思います。

まず奥出雲町文化体験実行委員会の取組みですが、「未来への道しるべ」は、たたら体験学習を通して「横のつながりと縦のつながり」の中に生み出されてきたと私は受け止めているのですが。

●**川田** たたら体験学習がスタートした頃は、「体験ありき」とい

う中で、ふるさと文化、歴史の伝承といった縦のつながりが強く意識されていたと思います。活動を続けていく中で、横のつながりが広がった。「ふるさとへの誇り」をテーマに、活動そのものの熟度が上がりました。活動を重ねながら、子ども達と我々が共に生み出してきたという感覚があります。道しるべは初めから狙ったものというより、自然発生的に後付けで出てきたと思います。

●**市村** 津南町は過疎化の波で人口が1万人を切りました。そうした中で生活している子ども達は、津南の前途を憂いている。平成の大合併では自立の町を選びました。そこが総合学習の契機だったと思います。子ども達がこの町を本当に良くしていこうと、各学年で仕組みや仕掛けを考え、町への提言などの形で貢献活動を行っていたものが、実際の形として出てくるようになりました。町民の心を取り戻そうと具体的に取組んで



コーディネーター



●**嶋野 道弘**
前文教大学 教授

■プロフィール
前文教大学教育学部教授・同大学院教育学研究科長、元文部科学省初等中等教育局教科調査官・主任視学官、元日本生活科・総合的学習教育学会会長。主著に『学びの美学』（東洋館出版社）『学びの哲学』（東洋館出版社）など。

きたものが縦糸で、町民も「子ども達がこれだけやるなら、私達もやらなければ」と変わりつつある。それが「町を支え、町に支えられて」という取組みにつながっていると思います。

●**小西** 私は子どもとの出会いと、その親御さんとの出会いがすべての源になっていると思います。「不適応行動」も子どもからの問題提起ではないのか。「助けてくれ」「困っている」への支援をどう形にしていくか。学校の中のチームワークもありますが、他機関との連携というチームワークも大事。子ども達は日々成長していますし、その時期、その時期に、その子の特性ゆえの暮らしにくさも持っています。そこをしっかりとその子の目線で考えていく。そして何もなかったことによって生じる「不作為責任」をもっと意識する。縦の連携、横の連携の中でスピード感を意識しながら情報を共有して、お互い同じ土俵で考える。その中で役割分担をしていくことが大切。出発はすべて子どもや親御さんの「ニーズ」からだと思います。

●**鹿毛** 「道しるべ」は、振り返ってみて「あれが道しるべだった」と気づくことの方が多いのではないのでしょうか。人と人がつなが

パネリスト



●**鹿毛 雅治**
慶應義塾大学 教授



●**小西 喜朗**
甲賀市立甲南中部小学校 校長



●**川田 勝巳**
奥出雲町文化体験実行委員会 委員長(奥出雲町立馬木小学校校長)



●**市村 直**
津南町立津南中学校 校長

たり、場ができたり。そうすると、人との出会いによって具体的な道しるべが急に立ち上がったります。道しるべが最初にあって、それにガイドされて何かが起こるということではなく、迷路の中にいるけれども、ビジョンがあることによって道しるべが見えたりする。そこで導かれるように何かが起こっていくというイメージかと思っています。

●**川田** 最初にビジョンがあって、それに向かって活動していくわけですが、年々活動がブラッシュアップされて、それによって目標やゴールも変わってくるということがあります。



●**小西** 最初はひとりから始めても、「これはいい」となったらぐんぐん広がる。みんなの気持ちの中で共通点みたいなものがある。それがだんだんと連なっていく。連携というイメージも一つあると思います。

●**鹿毛** 目指す方向性の展望がまずあると思います。明確ではな

いかもしれないけれどまず動き出す。そして立ち止まって、「こうすればこうなる」「次はこうなる」と。子ども達を見ると「次はこうかな」と子ども達自身が道しるべになる場合もあります。今までの教育のあり方と全然違う発想が出てきていると思います。今までは走り出す前に考えて、「こうすべき」と歩むわけです。道しるべは確認のためにある。しかしそうではなく、やりながら考え、そのときどきで目標が変わっていく。「山頂へ行こう」と思ったけれど、振り返ってみると子ども達がこうだから「やはり池に行こう」とか。ビジョンがそこで深まって、道しるべの活用の仕方も変わってくる。やっていく中で立ち上がってくる道しるべ。とても自由で、「べき」に縛られないスタンスが求められていると思いました。

●**川田** 横道に逸れてゴールに辿り着くのが遅くなるかもしれないけれど、子どもにとって意味のあることならそれもいいのではないのでしょうか。

●**小西** 私は社会福祉課の指導主事も兼務していましたが、福祉の仕事は「必要性」が制度になっていきます。ところが学校は、「べき」があって、ルールから始まる。「こ

の子はこの学級の対象児か」という話から始まります。特別支援になってから、福祉のような「支援」ということばが出てきて、その子を基点にして考えることができるようになった。学校も以前に比べるとちょっとやわらかくなってきたという感じはあります。



●**市村** 私たちの取組みは「津南町を良くしたい」というのがスタートです。子ども達は津南の大地をキャンパスとして、出会ったり、気づいたり、発見したり。私は最終的には感動体験につながればいいと思っています。町にないものだったら、自分たちでつくってみる。そういうところまで道しるべをつなげていけば、もう少しふくらみのある活動になるような気がします。

●**嶋野** ありがとうございます。「振り返って」「一歩先に踏み出す」「『べき』ことを壊す」…ほかにも沢山のキーワードが出てきたと思います。

子どもの中に 道しるべが立ち上がる

グループセッションでは、これまでに会った道しるべや、これからの子ども達の道しるべについて、多くのキーワードがご参加の皆さんから集まりました。



これまでの歩みの中での自身の印象深い「道しるべ」について、①「何を目標して」②「どのような道しるべがあったか」をカードに書いて、グループ内で互いに情報交換しました。



●**嶋野** 「私の道しるべ」は個人にとって価値のあることなのでまとめるのは難しいですが、話し合いをしていたときの感想を発表していただくと思います。

●**参加者①** 私達は子どもの遊び場づくりの活動をしています。遊びを通して子ども達は色々な体験をして人とつながります。沢山経験した子どもが学校に行くと、更に色々なことを学べるのではないかと話していました。私自身は、出会いや人、その人が発することばがとても大事ではないかと思っています。そういう積み重ねの中でここまで来られたのかと思います。

●**参加者②** 私達のグループは人

との出会いがあったときにどう選択してきたか、どういう行動をしてきたかというところで、今の自分達があることを感想として持ちました。そして、どのタイミングでその人と出会ったかということもポイントになると思いました。

●**参加者③** 私達のグループでは「道しるべは人との出会い」という話が多かったのですが、その中で「道しるべは、ここにいる人達にはあまりないのではないか」という話がありました。フォーラムで発表された受賞者や実践内容は、誰かがしたことを倣ってやっているのではなく、自分達で道のないところに道を切り拓いている。だから「道ができた後に道しるべができていくのではないか」という話を聴いて、すごく印象に残りました。自分達も、何もなかったところに新たな道をつくっていく教育実践をしていきたいと話し合う中で感じました。

●**嶋野** 「僕の前に道はない、僕の後ろに道は出来る」と。では、パネラーの皆さんにとって「今となってみればあれが道しるべ」というのはありますか。

●**小西** 私は出会いだと思います。出会って色々なことばをもらっても、一晩寝たら忘れることもあれば、あとに残ることばや出会いもある。

それは自分の中に影響される何かがあるからだと思います。心にピタッとくような何か。自分の中で何を大事にしているのかが関係しているかもしれません。頭で考えたのではなく、体験を自分なりに言語化して、経験知とか、経験則に整理していくから、そこに響くものがあると思います。「気がついたら道しるべになっていた」という感じではないかと思っています。

●**川田** 人生の道しるべに当たるところについてですが、私は、教育学部に進むことを父親に話したときに大反対されました。実家は50～60人が働く菓子製造業をしており、父親は私が跡を継いで会社を経営するものと思い込んでいたようです。私が教員になると決めたのは父親の「教員採用試験に落ちて家跡は継がせない。教員になるのなら家に帰って来ることは考えるな」のことばでした。退路を絶たれたわけです。これが大きな道しるべになりました。



た。方向を示されるのではなく、戻る道を閉ざされたという道しるべです。(笑)

しかし教員になってからは、私が指導するバレーボールの試合を見に来てくれるなど、私を応援する父の笑顔が道しるべになっていたと思います。

●**市村** 私は教員以外まったく考えたことはありませんでした。父親も教員で、教え子が正月やお盆に毎年来ると「教員も案外尊敬されている」と思い、「では、自分も教員に」と。迷いなく今に至っています。道しるべはなかったという感じでしょうか。

●**鹿毛** カミングアウト大会みたいなことに…。(笑)

私は教育心理学者として30代前半のときに、恩師の紹介で「授業を見てみないか」と横浜にある学校に誘われました。そのときにショックなことがありました。そうそうたる横浜の校長先生達と一緒に同じ授業を見ました。授業が終わって校長室へ戻るまでに、その先生達の協議がもう始まっている。「あの子のあの発言はスゴイね」「あれを見落としてしまったね、あの先生」と盛り上がっている。新米の私にはその発言がわかりませんでした。見えていなかった。しか

し、その後も授業に呼ばれ続けました。次も呼んでいただいたということは、関係性の中でそういうことが起きている。これは未来への道しるべにつながると思いますが、出会いに加えて、環境側からの投げ掛けがある。興味があるからこちらにもそれに呼応する。そのプロセスの中で意味付けをして、いつの間にか自分がそちらに行っていた。小学校、中学校の先生になるつもりで、授業研究をするような研究者になろうとは夢にも思いませんでしたから。

●**嶋野** そうすると、ゴールの頂上は見えていなかった。



●**鹿毛** 見えていないですね。しかしビジョンはありました。子ども達の表情や先生方の授業で「あ、これだ」ということを日々確かめていくと、そこに「未来への道しるべ」を自覚できます。

●**嶋野** 今回のフォーラムの準備を進める中で、私の頭の中に浮か



んできたのが「大人と子どもの違いは何か」でした。その1つが過去と未来の時間の長さ。過去を長く持っているのが大人。子どもは過去が少ない。10歳の子どもは10年の過去しかないけれども、その代わり、仮に平均寿命が85歳だとすれば、75年の未来があります。この時間の違いは大きいと思います。大人にとっての道しるべは、これまでの歩みの中にあったもの、つまり過去で、振り返って捉え直すことができる。子どもは過去をいくらかも持っていない。そうすると、子どもにとっての道しるべは、今にあって、現在、誰と、どこで、どんな活動をしているか、どんな人と出会っているか、どんな本を読んでいるか、まさに今現在が、やがて大人になって過去を振り返ったときに道しるべになっているのではないかと。

では、今の我々大人が未来に生きる子ども達のために、私達が与えるわけではなく、子ども達自身



が道しるべを見つけ出していくために、大人は子どもにどんな支援をすればいいのか、そのあたりを語っていききたいと思います。

●小西 子どもの未来は、子どもの可能性につながっていくのではないかと思います。就労支援に関わる中で、「その子の顕在能力と潜在能力を整理しましょう」ということをよく言います。「本当はうちの子、こういうことができる」という潜在能力を、その子なりの力量を考えて、もっと表に出てくるようにする。未来に対する可能性を考えると、潜在能力を顕在能力にしていけるような働きかけも大事ではないかと思います。

自己肯定感や自信を高めていく

●川田 大人は何をすればよいのかということですが、選択肢を広げる、視野を広げる、可能性を広げる力を子どもにつける、ということかと思います。動機付けが「期

待×価値」という鹿毛先生のお話がありましたが、成功する見込みを持てる力は自信であり、自分を認める自己肯定感であり、そうしたものをできるだけ高めていく。そして、主体的な価値付けについては、子ども達に「良いもの」「本物」を知らせることが大事だと思います。

●嶋野 「良いもの」や「本物」というものは、この縦や横のつながりに中に沢山埋もれていると。

●川田 その通りだと思います。

●市村 私は、そこに生きる価値というものを子ども達自身で勝ち取ってもらいたいと思います。そこには出会いや発見や感動も。感動体験は身の回りに沢山あります。自信をつけて、自分の足元を見つめ直していくことかと。

●鹿毛 道しるべは「通過点を確認するチェックポイントではない」という発想で考えたとき、キーワードになるのは「自己実現」だと思います。自己実現なら、ゴールを示してこちらに來なさいという「べき」とは違い、その場、そのときの出会いや投げ掛け、「こうしたらいい」という気づきが子どもから出てくる。一人ひとりがそこで迷ったり悩んだりするけれども、そこで道しるべを見い出して、その子の中に道しるべができていく。その一瞬一瞬

に自己実現があることを、我々はどれだけ意識できるのかも浮き彫りになってくる。

ではそのときに、大人は何をするのかということですが、未来を語るということよりも「今」を大切に。先程の逸話で右も左もわからない私が授業を見て「今」を見い出した。先生方がどう授業をつくっているのかという「今」を見だし、そうそうたる校長先生方が何に着目し、どういう発言をしたかという「今」を見ました。「今」の中にビジョンがあり、そこにシンクロするような形で育てていただいたと思います。

それと同時に、「受け取る側」にも「期待」と「価値」がなければならぬ。道しるべが示されても一歩先に行けないわけです。「できる」という期待や希望をどう見せてあげるのか、それは日々の笑顔やそうしたことの積み重ねにあるかもしれません。「価値」は、やはり本物に出会う直接体験。「あるものに注目する」ということと、「できることに注目する」ということは、まさに足元の宝ものです。その再発見というところに本物があり、出会いがあるから価値を感じる。子どもは、過去がないだけに、未来にこういう選択肢があることを、色々な

本物体験で目の当たりにする。どこにビビッとくるかは、その子によるわけです。我々は懐広く、「多様な可能性を持つ子どもの自己実現はどこにあるのか」という教育観を土台から持たなければと思います。

具体的に「自己実現」を取り上げると、津南中学校の発表で生徒が地域巡検で河岸段丘に桜島の火山灰があることを知りますが、「桜島の火山灰」という具体的なものの出会いが、その子の道しるべになることもあります。その出会いによって「次はこれを調べよう」という問いが生まれて学習が深まっていく。そのときに大事なものは、「遊び」と「自由」ではないでしょうか。「遊びから学ぶ」には自由が確保されていなければならない。「べき」の対極は「自由」。学習者も「自由」ということを考えなければいけない。「遊び」と「自由」から自己実現に結びつける何かを目指す、そうしたビジョンが今ここで共有できたのではないかと思います。

●嶋野 「つながりが生みだす未来への道しるべ」は、「これは哲学だな」と何度も思ってきました。ですから、具体的に何をどうする、何がどうなのかというのはなかなか出せない。けれどもヒントやポイ

ントは出ていると思います。たとえば私だったら、「ニーズから始める」というのはほんとに大事にしたい。

先日、不登校の子どもを受け入れている博報賞受賞校の「西濃学園」のシンポジウムに行ってきましたが、不登校で何年間も授業が遅れる。だからこの学校は「リカバリー」という授業科目をつくっています。生徒によっては小学校6年から始めるとか、自分は5年から始めようとか、その生徒のニーズによってやり直しをする。「ニーズから始める」は、色々なところに通ることだと思いました。

もう1つは「今」です。子どもの未来は「今、誰と、どこで、何をしたか」の一つ一つが、振り返ったときに「これが自分の道しるべだった」ということになる。今を充実してやるかどうかということではないかと思います。

今回、このテーマと向き合っていて、私自身もパネルディスカッション

の準備をする中で沢山学び、今日もまた沢山学びました。最後に、私なりにことばにまとめてみました。

——子どもは、あこがれや夢や希望、目標やめあて、思いや願いを持って今を生きています。あこがれや夢や希望とは、今のままの自分では実現できないけれど、いつか実現してみたいもののこと。目標やめあてとは、今の自分が頑張れば実現できそうなもののこと。思いや願いとは、あこがれや夢や希望ほど大きくて遠くはなく、目標やめあてほどはっきりしていないけれど、常に生まれて、すぐにも実現してみたいもののこと。あこがれや夢や希望、目標やめあて、想いや願い、それらは子どもの今日、明日、未来です。

自分と、人や社会や自然とのつながりから道しるべを見つけ出し、道しるべを辿って、未来を目指すのは、子どもにとっての“ときめきの旅”です。

子どもを“ときめきの旅”に出しましょう——。

いいディスカッションができたと思います。ありがとうございました。(拍手)

